
溺愛キャンディ

相野谷 華苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

溺愛キャンディ

【Nコード】

N9621T

【作者名】

相野谷 華苑

【あらすじ】

ここは平和な黄桜国、そこで文官として働く文字フェチの超鈍感娘の閔鈴と彼女を溺愛して小さな頃からせつせと餌付けに励む国王候補の麗稀。そんな二人の宮中での恋愛物語

思い返せば

いつも私の口には甘い甘いキャンディ。

それをくれるのは眉目秀丽、文武両道なこの国の偉い人
小さいあたしの認識なんてそんなもんだった…

「閔鈴^{みんれい}、お腹がすかない？僕の飴を上げようか？」

「麗^{れい}稀^しちやま？いいの？」

「もちろん。これからも夕餉以外でお腹がすいたら僕の所において」

まさかそれが餌付けだなんて思うわけが無く。

「他の人にお菓子を貰ってもその場で食べずに必ず私に持って来なさいね」

と笑顔で言うのを笑顔であたしも頷いた

渡したお菓子代わりにもつとたくさんのお菓子が貰えたからせつせと彼に運んだりした

そのお菓子をくれた相手をそれで降見なくなっても覚えてなかった。まさかそれが害虫駆除だなんて思うわけが無く。

あたしの周辺はこうして小さな頃から外堀を埋められたような気がする

思い返せば（後書き）

ああ…勢いで投稿してしまった…

カテイもPromiseも結構設定とか気を使うんで…何か…勢いで書ける話を書きたかったんです（涙）

なので一人称でぶつとび娘『閔鈴』見参です（笑）

お使い

いつもこの瞬間がどきどきして一番好き。

そつと茶封筒を開くと香る紙とインクの匂い。

私は朱しゆ 閔鈴みんれい23歳、黄桜きおう国文官として日々充実してる

周りには「さつさと嫁にいけ」や、「女のくせに文官など」と…
とされているけど、気にしない。何と言っても私は無類の文字フ
エチ。世界各国から手紙や、書類が送られてくるこの部署は私にと
ってパラダイス！

今日の前にあるのは新しい書類の翻訳の仕事。

さあ〜！待ってて文字ちゃん！今私が解読してあげるからね〜！

！…

「閔鈴みんれい、この書類を麗稀れいき様が斎梟さいきう様のどちらかに渡して貰える？」

ええ！？何であたし？

机から視線をあげると上司の儀晶ぎしやう様と目が合う

「お〜い閔鈴。そんな思いつきり不服そつな顔をするよ僕はさだ
からね。余計にいじわるしたくなっちゃうぞ」

「ドSのくせに…」

「へえ〜。そつか閔鈴は僕の事『ド』がつくさだと思ってるんだ」

笑顔が恐いつ〜！今までの優しい気な雰囲気どこ行った！？

ぎゃ〜！！暗黒帝王光臨しちゃってる。美形が凄むと迫力倍増す
れる。

そうあたしの上司の儀晶様は超がつく程美形。ってか女の人でも通じる程に綺麗な顔。黄桜国の中でも五本の指に入るその麗しさに外出すれば失神者が続出だったり…

まあ…あたしはそんな顔には騙されませんが…何せこの人お腹真っ黒だし

…って、SとドSの違いって何!?

「すぐ行つてきます!」

「素直な子は僕大好きだよ」

「遠慮しておきます!」

おお…暗黒再び…

「いつてきまゝす!」

さつさと逃げるが勝ち!

儀晶様の手から書類を半ば奪い取り部屋を飛び出した。

*

「ふう…殺^やられるかと思つたわ」

全く必死に逃げて汗だくだわよ!あの鬼上司め…

あたしはがつつり文系だつつの!

若干必死すぎて書類がよれちゃったよ

「あゝそれにしても麗稀様が斎某様：めんどくさい二人だなあ」

次期国王候補で国の人気No1・2の二人を掴まえてめんどくさいとか誰も聞いてないから言えるんですけどね

「どうせならこんな書類、転送術でぽんっ！とか送れたら楽なの…」

そしたらあたしは今頃あの書類にがつつりハマってるはずだったの…

おっとそんな事考えてる間に麗稀様の執務室じゃん…
とりあえず隣の警備騎士に挨拶して…と

「よしっ!」

まあ、麗稀様も斎某様もどっちもどっちなんで…

まあ、てっとり早く終わらせて帰りたいんで

まあ、書類ちゃんがあたし待ってるんで

とりあえず…扉を叩き…

がつんっ！

…え？

『…麗稀様あゝ』

…はい？

扉の内側から聞こえる女性の声。

余りの驚きに手より先に頭突きをかましてしまいました。

『…お願いです。私をぎゅっわたくしと抱き締めて下さいませ』

…えつと…昼日中の執務室ですよ？

思わず周りを確認してしまうのはあたしのせいじゃないと思う

取りあえず扉の横の警備騎士に微笑んで誤魔化してみると「今城に滞在されてる隣国の聖瑛様です」と聞いてもいないのに答えてくれる

面倒くささ極まりないシチュジャンかつ！！

この中に飛び込んだら…いろおおんな意味で生きて帰れる自信がない…

『誰だ？』

中から麗稀様の声が聞こえました…

頭突きはしましたがノックはしてません…なのでこの部屋はスル
ー決定！

そうと決まれば！ここに長居は無用！ドロンです！！

ドロンっていつの時代だよっ！！

ガチャ…

ああ…変な突っ込みを入れてる間に、ぎゃく！魔の扉が開くう！！
こういう時は…ノブを掴んで髪の毛の縛り紐を外して…と

ノブを紐でガチガチに固定！珠結びでこれはなかなか外れません！

「ちよっ！その騎士さん！扉の前に立って！！ほらっ！ノブ抑えて！」

「は？」

「姫様と麗稀様の間を邪魔したとなったらあたし処罰されてしまいますからあ」

うるうると瞳を潤ませながら上目遣いにおねだりポーズ。

先月のファッション誌『鳴杏めいあん』にこれで落ちない男はいないって書いてあつたんだから間違いない…はず、まあ…あたしがやって効果があるかは疑問ですけど…

「だから、あたしがここを離れるまで扉の死守お願いしますう」

「え…あ…あの…」

この騎士さん女性免疫ゼロだわ…真っ赤になってしどろもどろになつてるもん。でもちゃんとノブを掴んで頑張ってる姿…グツジヨブ！貴方のその律儀さ泣けてくる

「その声…閔鈴？」

ぎゃ〜！『嬉しい事があつた時の声』で私を呼ばないでっ！！

「…なんだこれは」

途端に温度を下げた声に思わず背筋に氷が入られた感じがするんですけど…

ノンノン！麗稀様、姫君の前で一文官の名など呼んではいけません！

ガチャガチャとノブが回されていますが…無視です！無視！

おおつ。さすが麗稀様！すでにノブが壊れそうです！
鼻を摘んでつと

「ミンレイチガウヨ。ソウジフネ！トリコミチュウナラ、マタア
トデマワツテクルネ」

「…関鈴、何言ってるの？怒るよ？すぐここを開けて」

だから関鈴じゃないんだってば…

失礼極まりない物言いですが、サツサトズラカリマシヨウ！

警備騎士さんに口パクで『よろしく！』とだけ伝えてあたしは
さっさとそこを後にしたのだった

捕獲？それとも補食？

ふう…殺られるかと思つたわ。つて今日何度目？厄日？

斎某様と麗稀様は城に何かあつた時に両翼を守る形にあるから、つまり斎某様の執務室は麗稀様の真逆にあるからこつから結構遠いんですけど…

あたしが勤める外務局の部署は麗稀様の執務室に近い。まあうちの部署が近いっていうより何でこんなところに高官の執務室が！？つていうところにある麗稀様の執務室の方がおかしいとは誰も言えません。

「…遠いし、一度本館を通らないと駄目なのがまた面倒くさい」「翼館から他館に入る際には身分の提示が必要で、いつも混み合ってるから出来れば通りたく無いなあ…なんて思つてしまつ。」

「ああ…愛しの文字ちゃんとの時間がどんどん減つてく…」

恨みますよ儀晶様。

あたしの文字ちゃんとの時間を奪つた事は、食べ物への恨みより怖いですよ。

しかもまた走つたから預かつた書類のよれっぷりつたら…半端ない。

あれ？入り口結構空いてるじゃん！ラッキー！

つて思つたのもつかの間…無情にもそこで出会つた斎某様付きの秘書に告げられた言葉に泣きそうになる

「斎某様は今日は国境まで見回りに出られていて戻られませんよ」

つまりはこの書類は麗稀様に届けるしかなく…儀晶様…あたしに何か恨みでも？

あんな修羅場に飛び込むのやだ〜！

警備騎士に預けようにも封筒に赤々と『機密書類』とかの判が押されてるしい…

渡さずに帰ってこんな時間だったら…怒られる事間違いないし…

あっ！思いついた！！

「紐で縛ったまま扉の隙間から渡せばいいんじゃない〜！」

あたしあつたまいい〜

そうと決まればさっさと行動！

スタコラと来た道を戻ってさっきの警備騎士さんに手を振ってみたりして…泣きそうな視線をこちらに向けてくるのは取りあえずスルーで…ごめん。

よし…まだ扉は突破されてないみたいだ…そのノブの外れ方からみて時間の問題みたいだけど…しかも今度は中から何だか怪しい術の印が聞こえてくるんですけど！

まずい…扉がふつとぶ。麗稀様は最高位の術師でもあらせられるから…警備騎士さんごとふつとんじゃうよっ！！

「麗稀様あストップ！」

「閔鈴？ああ（やっつと）戻って来てくれた。何だか扉が壊れてるみたいなんだ（さっさと）この扉開けてくれるかな？」

口調に（ ）がついてるのは何で？っていうか…開かない時点で諦

めるよっ！

何て口が裂けても言いませんよ？だってまだ死にたくないですもん
とりあえず少しだけ結んだ紐を緩めてっど…

少し開いた扉からちよつとだけ中を覗き込んでみる

目の前に怒りマークをつけながら微笑む麗稀様。姫様は全く見えない…残念。檻に入った餌を見てみたかったのに…

「れ…麗稀様におかれましては…相変わらずお麗しいお姿で…」

「そんなとつて付けた言葉はいらぬ。というか閔鈴にそんな言葉使われるの嫌なんだけど…早く扉開けて入っておいで」

にっこり微笑まれても…私には口が裂けてる様にしか見えないんですけど…

「あの…これ」

書類を隙間から差し込んでみるけど、やっぱり受け取って貰えない。
い。

「…麗稀様？これ儀晶様からです」

「中に入ってちゃんと机に置いてってくれるかな」

その笑顔が怖いんです…。絶対中に入ったら捕獲される…食される。

「い…忙しいので…」

「僕とこの書類について話す時間もとれない程？すぐに返さないと駄目な書類かもしれないのに？」

「このまま待ってますから…」

「閔鈴」

「き、きちんと放り込まれた餌をご賞味下さい…」

「餌は自分で狩る方なんだ」

「ここはパークですので…野生はちよつとご遠慮頂きたい…です」

「…ここを破壊されて捕まると、自分できちんと入ってくるのどつちがいいかな？」

んぎゃー！何て事！二者択一になってないっ！！どつちも補食じやんかっ！

「どつちもご遠慮…」

どごおおおん！

つていうか…普通に横の壁が吹っ飛びましたけど！？

返答聞かずに破壊フラグ立っちゃってるんですけど！？

しかもそこから優雅に出てこられても、ねえ？

破壊の埃煙を浴びながら、固まるあたしに麗稀様がつこり笑いかけて下さり、これまた固い笑みで返すしもなく。

「れ…麗稀様？」

「やつと閔鈴を全部見れた。初めからこうしておけばよかったんだよね？面倒くさいからこれこのままにしとく？」

麗稀様の視線は財務部報告に『朱が聞き分けの無い行動を取った為、壁の修繕費』とか言うぞつていう顔してるし…そんな事で財務に睨まれたら儀晶様に…ぐふっ！

「あの…いや…直して頂けると…有り難いです」

「じゃあ中でお茶してく？」

う……そんなにつこり執務内指差されましても…それってお茶しな

かつたら報告するけど…って脅しっすよね？あううう…

うおっ！破壊された壁から、餌…もとい姫様と目が合いましたけど。心なしか睨まれてるのは…気のせいじゃないよねえ。

ああ…胃が痛い。そうだった！ここは常套手段で乗りきろう！

「有り難いのですが…職務中…」

「立花堂のお菓子があるけど？」

「喜んで！」

はっ！？今あたし何て言った？「喜んで！」とか言っちゃまった！？ぎゃー！！何故だ自分！？何故こんなチープな罠に引っかかるんだ！？

そんな事では野生で生きていく事なんて出来ないぞっ！！

でもさ…

だって立花堂！あの甘味所上位三位に入るあの立花堂！

たかだか焼き菓子一個を買うのに五時間待ちの立花堂！

それに麗稀様にお菓子を差し出されると、昔からのくせでどうしても『はいっ』って何でも答えちゃうのよう…何故かは自分でも永遠の謎なんだけど…

「じゃあ中にどうぞ」

あたしの気分とは真逆のこの声が憎い…しかも壊れた壁からどうぞってどういう事？

「し…失礼しまーす…」

「あ…聖瑛殿はもうお帰りですよ？扉が壊れてるようなのでこ

ちらからどござ

「え？れ…麗稀様！？」

さり気なくなんて事を言うんだ！麗稀様っ！

「え？あ…あの…」

いやーん！しどろもどろになる様可愛いつ！！さっきまであ
しを睨んでたなんて嘘みたい！！っていうか…ええ！！様様退場！？

「麗稀様。よ、よければ、せせ、せ、聖瑛様もご、ご一緒に…」

「こら関鈴。これは機密書類でしょうが」

駄目だぞっ可愛く言われても、瞳が怖くて仕方ないんですけどお
！！しかも思い切り姫様に聞こえる声でいってますよね？それ…
機密書類って…機密書類って…ぎゃー！！！！

「というわけですので、聖瑛殿。機会を改めて頂きますでしょう
か？」

改めなくていいっ！！

「そういう事でしたら…私わたくしは…」

のおおおお！お願い様、帰らないでえええ！！

「詠進えいしんここは大丈夫だから、聖瑛殿を部屋までお連れしてくれ
」
「了解致しました」

護衛騎士を連れ立って、去っていく様を涙目で見送りながら、

あたしの頭の中では警報がなりつぱなし、これは立花堂どころじゃない！今すぐここを去らないと危険！危険！

エマーゼンシー！！エマーゼンシー！！

「麗稀様、急ぎの仕事を思い出しましたので…」

ごんっ！！

出て行こうとした壁の穴がない…から頭打ったんですけど…

おーい、手を翳しただけで壁が一瞬で直ってますけど…いや…それぐらいわかってたんですけどね…何だか自分の悩んだ胃の痛み返せっていつか…やっぱり麗稀様は恐ろしい…

あわわ…早く退散しないと…扉、扉。

ガチャ！ガチャ！

あっ…あたしの髪紐が見える…

じゃあ！護衛騎士さんに向けてもら…って、奴は姫様送ってた
ああああ！！！！

「それじゃあ、お茶しよっか？」

後から聞こえてくる優しい声が猛獣の遠吠えに聞こえるのは私だけでしょうか…

執務室の攻防

蛇に睨まれた蛙っていうのは正しくこういう状態の事をいうんではないでしょうか？とはいっても麗稀様は微笑んでいらっしやるんですけどね。何でしょうか？その微笑みが深くなるほど怖くなるのはあただけなんでしょうか？例えば今みたいなテンションMAXの麗稀様程恐ろしいんですけど…

「さ、関鈴座つて。お茶用意するから！」

「わ、わ、わ、私が致わたくししますからあああ！！！！」

茶器を麗稀様の手より強奪成功！ふう、よくやったあたし！

これで麗稀様にお茶でも入れて貰おうもんなら、一緒に休憩の第一のコース『私』第二のコース『麗稀様』で、大差をつけて敗北決定じゃないですかっ！！！！無理無理！絶対無理！

「そう？関鈴がお茶を【僕の為】に入れてくれるなんて嬉しいな」

何で【僕の為】強調？

そりやお茶を入れるぐらいでこの檻から逃げ出せるんなら、どんなお茶でも命に代えても一級品に入れてみせますよ？だって

「家臣ですから！」

「……」

さむっ！！突然部屋の温度が…。どうみても原因が横に居る人な気がするんですが…。もしかして…あたし…何か地雷…踏みました？

ああ！そうかつ！！

あたしが直接的な部下じゃないから使った言葉に怒ってらっしゃるんですね。何と言っても麗稀様はこの国で斎棊様と共に、二番目に地位が高い右宰相様でいらっしゃられますからね！ちなみに斎棊様は左宰相様なのですよ。一外務部の書仕に家臣など…恐れ多いです…反省！

「申し訳ありません。私わたくしごときが家臣などと…」

「閔鈴…何言ってるの？かんちが…」

「でも！！精一杯お茶は入れさせて頂きますから！」

追求は身の破滅。よしっ！この件は、スルーで！

「先日、同僚に褒められたんですよ！「閔鈴の入れるお茶は美味しい」って」

「…同僚って儀晶？」

「まさかつ！儀晶様にお茶を入れるなんて…見返りに殺してくれっっていつてるようなもんですからっ！！」

お茶の葉の選別から蒸し方から注ぎ方に至るまで、全てにドSなあの人のお茶が入るなんて、それに耐えうる猛者をあの部屋で見つけた事なんてないですし！！

「同僚の孝謙こうけんが言ってくれたんです」

「へえ…閔鈴は…同僚に、お茶なんて入れてあげるんだ…」

さ、さむいいいい！！

絶対零度お？ど、どうして？

「しかも、何だか嬉しそうに聞こえたのは僕の気のせい？」

「え？いやぁー孝謙いい人なんですよ！あつ！でも…あの…し、仕事はしてますよ？ちよつとした休憩…なんか…です」

「休憩ね…僕の所には居る時間も無いのに、休憩とかしちゃうんだ…」

ぐうつ！なかなかさっきの件、根にもってやがる…

「さっきのは…その…聖瑛様がいらつしやいましたし」

面倒くささ極まりないなんて言いませんよ…もちろん！

「聖瑛殿がいたからって、どうして関鈴が僕とお茶出来ないの？」

ええー？あんなだけの姫様のアタック無視ですか？

「抱きしめて下さい」とかって言われてたのスルーですか？

『ぎゅつ』とかって言われてたの空耳じゃないですよね？

とか、言いたい事は山ほどあるけど…聞きませんよ。聞けば身の破滅ですもん…ここは無難に…

「身分の高い方と同室になるには、今の私の服装では失礼にあたりますから」

ついでに貴方と一緒にいるのもほんとは逃げたいんだよあってちよつとだけ含みを持たせてみたり…あ、やばい…余計な事した気がする。

だって麗稀様がここぞとばかりに極上の笑みを浮かべてらつしやる…やばい…

「閔鈴が失礼だなんて、そんな事を言う奴は僕がきっちり排除してあげるよ。閔鈴は何を着てても可愛いし、僕の大事なお姫様なんだから」

ぞぞぞ…うう背筋に何かが走った。

さぶいっ！！さつきとは違った意味でさぶいっ！！！！

この鳥肌見せたい！！

何でこの人はいつもこうなの？お姫様って何！？姫じゃないし！

あたしと麗稀様と齋某様は年齢は違えど、所謂『昔なじみ』って奴で…でもそれもただあたしのお父さんがお二人の教育係だったからで…お母さんを亡くした直後に、いつも父と一緒に行動してた幼子のあたしに対して二人は妹みたいな愛着が湧いたらしく、それ以来二人とも『僕のお姫様』って呼んでくる。

…未だに。あ…もちろん血のつながりなんてないんで！

ありえないでしょ！？23の娘にむかって『僕のお姫様』ってどうよ？

宮に勤めだした初日に、廊下ですれ違った時の『ああ、僕のお姫様、困った事はない？』に周りドン引きよ？

それ以降も麗稀様も齋某様も改めて下さらなかったから、「え？こいつ何者？」って同期で仲良くなりそうだった子皆に遠巻きに見られる存在になったわよ！

二人に関わりたくないって思うあたし間違っていないわよね？

しかも何気に『大事な』とかオプシヨン増えてるしっ！！

「麗稀様のお気持ち嬉しゅうございます。ですがどうぞお気持ち

だけでっ!!」

「閔鈴、いいかげん他人行儀なその口調どうにかならない？」

わざと溝を作ってたよっ!!」

「職務中ですから…あっ！お茶入れますね」

頑張れ！あたし！顔に微笑みの石工貼付けろっ!!」

「麗稀様はどうぞ書類に目を通して下さい。お茶お持ちしますから…」

「閔鈴が僕の秘書になってくれたらいいな…そうすればいつでも休憩中に閔鈴のお茶が飲めるんでしょ？」

ちっ！政務机じゃなくてソファに座りやがった…一向に書類に向かう気配無いんですけど…ああ、あたしの愛しの書類ちゃんとの時間が…しかも麗稀様が『秘書に』って言ったらほんとに秘書にされそうで恐ろしいんですけど!!」

…仕方ない。立花亭のお菓子と機密書類、両方手に入れる為には、こうなったら奥の手を使うしかない…。

「麗稀お兄ちゃま…」

「え？…み、閔鈴？」

ソファに振り返って思いっきり潤む瞳で麗稀様を見つめてやる。もちろん振り向く前に目を異様なぐらい見開いたからうるうる度2倍！

くくっ！久しぶりに『極技』使ったから麗稀様めっちゃ動揺してる！

「…今の仕事好きなの!!だから秘書になんてしないで…」

「閔鈴…大丈夫だよ。閔鈴の嫌がる事なんてしないから」

おおう！ソファを立ち上がってこっちに向かってきます！や…やばいっ！！やりすぎた

「まだあたし仕事たくさんあるのっ！！だからお願い。早く書類頂戴っ！！」

「…すぐ済むから」

ふうー。

危機一髪…あと50センチで腕の中にすっぽりだった…あぶねえ！。

しかも今までが嘘みたいに手の動き早いし…1センチはある書類がもうあとちよっとって…やっぱ極技は最強だね。仕事は凄く尊敬出来る優秀な人なのになあ…何でシスコンの残念君なんだろうなあ…もう三十二だった筈だし、早く嫁でも貰って落ち着けばいいのにねえ？

何てお茶を入れながら思ってしまうのは、うざいぐらいな人達だけど、昔から可愛がってもらってあたしにとってもお兄ちゃんのような大切な人だからなんだけどね

「はい…終わり！」

「お疲れさまです！これお茶です。それではあたしはこれで…」

「…え？お茶は？」

「護衛騎士の方も帰って来たみたいなので、戻ります」

そう、お茶入れている間に扉のノブがガチャガチャって動いていたんだよね？あれってあたしの髪紐解いてくれたんだと思う。

「で、でも立花亭の…」

「頂いて帰ります」

…へへっちゃんと抜かりはありませんよ？

書類を持つ手と反対のあたしの手にはちゃっかり立花亭の焼き菓子セットがあるのです

「…み、閔鈴？」

「ありがとう！お兄ちゃん！」

言葉最後にハートマークを付けるのを忘れずにね！

では、さっさと退散なのですっ！！

ちゃんと扉も開いたし、ハートマークの威力から立ち直った麗稀様が扉の向こうで「くそっ可愛過ぎる」とかわけのわかんない事を叫んでましたが、やっぱりこれももちろん追求はナシなのであります！

執務室の攻防（後書き）

えへ…閔鈴ちゃん『鳴杏^{めいあん}』読者の最近の女の子なので、小悪魔ちゃんです（笑）

それにそんな閔鈴に振る舞わされる最強で最弱な麗稀だったので
す

やっかいな人

さつさと麗稀様の部屋を辞したのはいいけど…はあ…もう夕方じやん…。

仕事あとちょっとしか出来ないし…、愛しの書類ちゃんとの時間が…ろう…

「くう…この書類が憎い…」

この書類さえなければ…今頃パラダイスだったのにいい…
やっぱり恨みますよう。儀晶様…

「只今戻りました〜！」

っていつても外務部、いつつも外出組で殆ど人いないし…うちの課ぐらいだよねーいつも全員集合って…暇なのかうち？

まあ…他の人は外部担当でうちは内部担当なのもあるんだけどさ…
うわあ…儀晶様の目が輝いてる…触らぬ神に祟りなし…スルーして自分の席に…

「関鈴…どうだった？？」

何…そのワクワク感…ドン引きですけど…

「書類届けるだけにしては遅かったからさあー」

「はあ？」

遅い？…今この人遅いつて言いました？

あんなに頑張ったあたしにこの人『遅いつ！』って言いました!？

「かつちーんっ！！！儀晶様！！！！このドS！！！」
「何とでも言っちゃっていいよ。で？どうだったの？」

泣いてやる！！絶対泣いて！パワハラ訴えてやるっ！！！！

「まず、麗稀様のところにお客様がいらしたんで、斎某様に書類届けようと思ったら出張中でした、麗稀様のところに戻ったら一悶着ありまして、書類はこちらになります。で？何か？」

思わず太々しい態度になっても仕方ないよねー

うわ…もう目が爛々しちゃってるよ？この人…っていうかもしかして…

「さつすが関鈴！もう書類帰ってきたんだっ！！！」

「はい？」

「別にこれ提出今日じゃなくても良かったんだよねー」

今、何て言いました？この人…さらっと人を叩き落とす様な事言いませんでした？

「だから、『届けてね』って言っただけだし」

「普通は直接届けたら持って帰って来いって思うでしょうがぁ！

！」

「そうそう！関鈴に行かせたら帰ってくる確率が上がるからさー」

事実が衝撃すぎる…しかもそんな事の為に極技使った自分が可哀想すぎるっ！！！！

「早かったから僕が助かる」

【僕が】ってどう言う事？【僕が】って……！！
っていつか…もう本気で疲れた…今日は定時で帰ってやる…

「……………暗黒魔王め」

「何か言った？」

聞こえてるに決まってる。

顔が笑顔過ぎるし…

って何であたしの周りの人ってこう厄介なのが多すぎるの！？？ちなみに多いの？ではまだ足りないので多すぎるの！？？ぐらいが丁度いい

「儀晶様…もしかして…齋某様が出張中なの知ってました？」

「ええー？そりやもちろん。付いて行ってるの軍の奴らじゃなくて、外務部だし」

笑顔で何て事を言うんでしょうか？この人は…

「儀晶様…一度本気で死んで下さい！」

「ええーまだまだやりたい事あるから無理いー」

暗殺者でも雇って本気で送り込みたい！！

…ちっ…しまった。確実に刺客の方がやられるわ…それも命狙われたなんて楽しい事になったら…儀晶様は笑顔のまま、その刺客は…ブルブル…想像するだけで恐ろしい。

しかもそんな刺客を放った事がバレたら、自分の身も危な過ぎるし…却下

「なああに、一人七面相してんのさ？」

「ほつといて下さい！悲しい上司持つ自分を哀れんでるだけですから……」

「だってえ！孝謙言われてるよお？」

「ええ！？お、お、お、俺っすか！？」

……ごめん孝謙。

100%のとばっちりです！

「……仕事戻ります」

麗稀様との事の後で儀晶様はしんど過ぎる……ここはやっぱりスル
ーで行こうっ！！

「あっ！閔鈴」

「何ですか？」

「机の書類。そっちは提出今日だから！よろしく」

「えええ！？」

提出今日って……もう就業時間あと一刻もないですけど？

まだ書類、開けただけですけど？それを今日提出？

「無理です」

「大丈夫！閔鈴なら日が変わるまでには出来るよ！よっ文字フェ
チ！」

「こおんのおおおあんこくきちくうううう！……」

本日午前様決定……ちーん

やっかいな人(後書き)

暗黒魔王、儀晶様降臨です(笑)

残業

最後に時計を見たのは夕餉の時間だった気がする。今頃この王宮にいるの…警備騎士ぐらいなんだろうなあ…それがあたしと同じ境遇の人？上司に恵まれていないというか…なんというか…

ぎゃっ！余計な事を考えてたら最後の最後でミスった！！

修正液をつけて…書き直して…ああ…

「出来たああ！！！！」

時間はまだ日が変わるまでたっぷりあるし！！頑張ったあたし！！

「疲れたよううう」

夕餉も食べずにぶっ通しでやってたから…、今頃になってお腹空いて来た…

ああ…こつやって机に頭乗っけるだけで寝てしまいそう…

「ヒモジイよう…痛いっ！」

…何か突然頭上から降って来たし…目の前に落ちてるカラフルなそれは…

「………飴？」

「お疲れ様」

「うわあ！！」

突然声かけられて心臓飛び出るかと思った

「れ…麗稀様。な、何で？」

ただ立ってるだけであの清涼感…ま…眩しすぎる。
うう…疲れ果てた自分には目の毒だ…

「それ食べていいよ？その様子じゃ残業申請忘れたな？」

そう、何を隠そうこの王宮、福利厚生がすっかりしていて残業申請を出すと、もれなく夕餉が付いて来たりするのだった…

「ああ…可哀想に、こんなに褒れて…」

誰のせいだ！誰の…！

そもそもあの書類にあんなに時間がかからなければ…まあ言いませんけどね

「麗稀様どうして？」

「ん？ちよつと用事があったね。で、外務部に明かりって珍しいから覗いてみたんだ」

こんな時間まで仕事なんて…やっぱ右宰相様って忙しいんだ…なのにこの清涼感。やっぱ麗稀様もうちの国で儀晶様を差し抜いて麗しさNO1の称号を持つてるだけあるわ…腰までの黄金髪は綺麗に頭上で結われてるし、高貴な人が滲み出でて所作がすごく綺麗だし。

「お疲れ様です」

「それは関鈴でしょう。さ、さっさと片付けて帰ろう」

「え？」

いや…帰るには帰るんですけどね…

「帰ろつって…麗稀様の自室この王宮内じゃないですか…」

そう、王族の方々は王宮の奥に自室を持っていらつしやつて、ちやんと自宅があるけど大抵そこに泊まる事が多いらしい。ま、これは侍女達の話聞いただけなんだけど…

いわゆる井戸端会議ならぬコンパクト女子会つてやつ？

「もちろん。送つていく、女の子をこんな時間に一人で帰せないからね」

その台詞をそっくりそのまま儀晶様に聞かせてやりたいっ！！ちなみに儀晶様はさつさと定時に帰られましたけどね…何か「今日は娘と遊ぶんだ」ってスキップして帰ったもの…ふっ溺愛娘から嫌われてしまえ…

疲れからか…考える事がダークになつてる。

ただ…もう今日は疲れが酷すぎるので…ややこしいのは勘弁願いたいので

「ありがとう…」

ぐふっ！「ありがとうございませす。でも結構です」って言おうと思つたのに！

こ…声が出ない…。

「（パクパクパク）」（訳：麗稀様何かしましたね？）

「ああ、いいんだよ？僕が好きでしてる事だからね」

麗稀様！ちゃんとあたしの動作見て！必死に口指してるでしょうが！！

「（パク！パク！パク！）」（訳：早く！これを！解いて！）
「そんなに感謝しなくていいよっ！」

ちっがー！ー！うっ！！！

どこをどう聞いたらそんな言葉になるんだあ！

ああ！勝手に人の机を触って片付けしないで下さい！！

「さ、行こうか」

「（パクウウウ）」（訳：いやあー！）

ぐえ…しまった…襟首取られてしまった。

こ、こんな深夜に…これからどうなるんでしょうか？

執務室ふたたび

なあって今あたしは昼に必死に逃げ出した麗稀様の執務室にいる
んでしょうかねえ

…しかも目の前に夕餉？

しかもこんな時間にありえないぐらい美味しそうなおムライスが…

「あのおお麗稀様？」

ちなみに声は執務室に入った途端に喋れる様になっただけですけど
ね…

「ん？どうしたの？食べて？」

いや…お腹はすごくすいてるんですけどね…

「帰っても夕餉ないでしょ？食べて帰ろう」って気持ちはとおっ
ても嬉しいんですよ？

でもね…でもね…

「何なら食べさせてあげようか？」

顔の…真横で美声が響くのっておかしくない？おかしいよね！

「ち、ち、ち…ちかああああい…！！近すぎる…！！！」

っていつか何で既にスプーン持って食べさせる気満々なの！？
しかも『近い』っていうあたしの叫びがスルーってどういう事！？
まずい！すでにオムライスにスプーンが刺さってます！！はやく
奪い返さないと…ありえない羞恥プレイをさせられてしまう…！！

「じ、じ、じ！自分でた、食べますからあー！！」

「そう？残念…」

「はあ、はあ、はあ」

一人で食事出来ないって人として間違ってるよね？それはあたし間違ってるよね？

とにかく…隙をみせちゃいけない。さっさとこれを食して家に帰ろう！

そうと決まれば向かう敵は目の前のオムライス！

パクッ！！！！

つうんま！！

このとろふわ感最強！？しかも今のやり取りで結構時間がたってる筈なのに…固まらずにちゃんとトロトロ…

これはもうがつつくしかない…けども…

もぐもぐもぐ…「つつくん…

じいいい

もきゅもきゅ…「つつくん…

じいいいい

もきゅ…も…

あのおおお、凄い視線痛いですけど…しかも真横だし…

「麗稀様…食べにくいです」

「え？美味しくない？」

「美味しいです…けど、み、み、見られてると非常に食べにくいんです」

「どうして？こんなに可愛いのに…」

さぶっ！！！食事してるのにさぶいですっ！！！！鳥肌ゾワゾワです！！

どおして麗稀様ってこうなの？紳士なんでしょうけど…それって相手が淑女であればこそでしょう！一家来にそんな事するから周り女性がハートマークの視線を送るんでしょうが！それをいつも迷惑だなんて…

「酷い！！乙女の敵！！」

「？どうして可愛いつていうのが乙女の敵なの？まあ…別に乙女の敵でもいいよ。関鈴さえ傍にいてくれれば」

…それって…あたしが乙女では無いって事でしようか…？

そりゃ23にもなつて嫁にも行つてない『いかず後家』ですけど、そんなにはつきり言わなくなつて…こうなりや見合いでまして…

「結婚してやる…」

「え？僕と結婚してくれるの？」

「は？何トチ狂つた事言つちやつてるんですか？麗稀様と結婚なんてあるわけないじゃないですか！！」

あたしは一般ピーポーですのに…嫁ぎ先に王家なんてとんでもない！貴族の家だつて無理！町のお菓子屋さんとは結婚できたら幸せかもなあ…つてあたしには大好きな仕事があるつての！

あれ？横から冷気が…

「へえ…閔鈴は、僕と結婚なんて…‥‥‥」ありえないんだ…」

「え…そりゃ…麗稀様…次期国王候補でいらっしやいますし…」
「じゃあ、国王じゃなかったら結婚してくれるの？」

…国王になつてない麗稀様を想像してみた。

無い無い！こんな顔の整った人の傍に24時間いるなんて色んな意味で耐えられない！

じゃあ…貴族でさえなかったら…無理！貴族じゃない麗稀様とか想像出来ない

「しません」

「……………」

「…麗稀様？」

？それにしても何で結婚できる？とか聞くんだろ？

一般の方に恋でもされてるのかしら？…でもやっぱり結婚は難しいと思うけどなあ…

一般は一夫一婦制の中、王族だけは一夫多妻制だし。万が一結婚出来たとしても一般人はよくて妾妃が限界だろうし…

「閔鈴…」

「やっぱりお勧めしません。諦めた方が両方にとっていいと思います」

「諦めるつもりはないですよ…」

「…そうですか」

まあ…恋心は理屈じゃないもんね。閔鈴は影ながら麗稀兄様の恋を応援いたしますよ

あ、『影』ここが重要ね！

表だつてなんて他の王宮勤めの女性が恐ろしくて出来ませんから！
「こうなれば…実力行使で…」とか横で恐ろしい事を言ってるのも聞かないフリします。相手の女の人に最大級の哀れ…もとい祝福を…なんせ妹みたいなたしにでさえこの溺愛っぷりですからね…

「…合掌」

「何拝んでるの？」

「いえ…まだ見ない相手の方に…」

ゴーン！ゴーン！

はっ！！あれは日の終わりの鐘！

「ぎゃー！！帰らないと！！」

「大丈夫。送るから」

「え？」

「おいで…」

麗稀様の広げられてる手は何でしょうか？

「あの…それは？」

「転送術で閔鈴の部屋まで送る。身体密着させないとさすがに無理だから」

「あー…そういう事です…か」

なら…ま、いつか。ここは素直に…麗稀様の腕の中に…

すみません！不可抗力ですからっ！！誰にも見られてないけど、

一応言い訳

…ぎゅって…く、苦しいんですけど…しかも今頭に何か当たった

んですけど!?

「あの…麗稀様?」

いつまで経っても部屋の景色が変わらんですが…

「…閔鈴、大きくなったね」

何でしょうか?このむずがゆい感覚は…

あ…景色が歪んだ…

…それにしても…眠い。

そうしてあたしはお腹もいっぱいになって安心して麗稀様の腕の中で眠りこけるといふ失態を犯してしまったのだった

執務室ふたたび（後書き）

ふふ…麗稀の恋心に全く気づいてない閔鈴でした

夜這い？

ふあゝあ…。寝た…非常に心地よく寝た。

そうそう…この小さい時お父様と一緒に寝た様な心地…よ…さ？

……ん？

……うーん？

…なんでしょう？この腰に絡み付く…感覚？……ううで？
えゝ字体変換しまして…腕？

人の腕…んぎやゝゝゝ！！？

いや…あたしいつも横向いて寝るんだけどさ

…目の前には見知った部屋の様子しかないわけで…

という事は…こ、こ、こ、怖くて後向けないんですけど…

考えるあたし…いや、考えるなあたし。これって夢なんて事はな
い…ですよねえ…

「…ううん」

んぎやー！！後の人動いたああ…。

しかも妙に聞き慣れた艶っぽい声で…って…聞き慣れた？

ガバア！！！！

起き上がって布団を跳ねのけたそこにいらっしやっしたのは…もち
ろん

「れ、れ、れ、麗稀さまああ!？」

「ん…みん…れい?もう朝?」

おおう…目を擦って伸びる姿が色っぽい…っじゃなくてっ!!!

「何やっちゃってんですか!?貴方!！」

「ん?…ああ、大丈夫。やってはないから」

そうか…やってないのか…それなら安心

「ってちがー!ーう!!!」

「何で人のベットに寝てるんですか!って聞いてるんですっ!!!

!」

「昨日閔鈴とこの部屋に転移して、戻ろうとしたらもう王宮が魔障壁を貼ってて戻れなかったんだ」

魔障壁って夜に外部からの魔術をすべて遮断する魔術だったっけ?なるほど外部からの転移魔術も弾かれてしまっんですか…知らないかった…

「そうですか、それなら仕方ない…:…なんて言うと思ったかあああ!?!?帰れないなら帰れないで迎えの人呼べばいいでしょうが!」

そうよっ!!!何であたしのベットで一緒に寝るっていう発想になるわけ?

大人な二人が一緒にベットで寝るってどうよ?何もなくなっただけ…万が一こんな事が周りにバレでもしたら…怖いっ!!!怖過ぎる!!!

「と、とと、とにかく今からでもいいです！すぐ帰って下さい！
今すぐ飛んでけっ！」

もう何がなんだかよくわからないけど、とにかく窓を指差して
みる。

麗稀様といえは、ベットで枕を抱えて（ちなみにあたしの！だけ
どね）上目遣いにこっちを見てるし…くそう…寝起きでも麗しいっ
て…どういう事？

コンコン

こんな時に誰！？

「関鈴？何だか騒がしいようだけど…大丈夫かい？」

んぎゃー！！！！お父様！！！！

やばいっ！やばすぎる！こんなとこ見られたら…どうなんの！？
もうあたしの頭の中パンク寸前で目が回りそうなんですけど！！
とにかくこいつ…あ、王族に対してこいつ呼ばわりは不味いで
すけど…非常事態なんで！こいつを隠さないとっ！！！！

「関鈴？開けるよ？」

いやー！！！！もう隠してる暇がないいいいい！！！！

布団でも被つとけえええ！！

バサアアア！！とガチャは同タイムだったと思います

「はあはあはあ…お、お父様、お早うございます」

「ああ、お早う。どうしたんだい？何だか凄い声が聞こえてきた
が…」

「む、む、虫が！そうっ！虫が出たんです！」

「虫？いつもならゴキ でも一瞬にして殺す閔鈴が怖がる虫って
…大丈夫なのか？」

「はは…ええ、突然でびっくりしただけですから！不意打ちなんて、なかなか奴らもやりますよね。ははっ！！」

とにかく誤摩化すしかないっ！！

さり気なく麗稀様の山を父様の視線から遮らないと…っってもうば
つちり見てるしい…

そりゃそうよね。寝てる相手に布団掛けたわけじゃあるまいし…
ベツトの上でつかい布団の山が出来たら…そりゃ誰だって気付
くわよね…

「閔鈴…それは？」

「はは…あの…その…」

どうやって誤摩化そう…しかも…後でなんかゴソゴソしてるしい
い…！！

何かやばいつ…！もの凄くやばい気がする…！！

「ぷはっ！閔鈴…突然、布団を掛けるのはいささか酷くないかい
？」

「な、な、な…」

「おや？麗稀様？」

「ん？これは、朱殿お早うございます」

麗稀様が両手を組んで頭を下げると、父様も同じ様に頭を下げ
…っつて

「何で出て来てんのよおおおおお！……！！」

朝一に朱家から響き渡ったあたしの叫び声は、軒先まで聞こえたらしい

夜這い？（後書き）

タイトルの『夜這い』とは襲う夜這いではなく。求婚者って意味の夜這いです

とうとう麗稀様、実力行使…もとい既成事実を持ち込みますが…？

あれ？

結婚前の女性がまさか男を寝室に連れ込んで…ああ…あたしの人
生終わったな。

しかも相手が麗稀様とか洒落になんないし…これから普通に道歩
くだけでも命の危険にさらされるじゃないか…

ああ…死んだ。もう完璧死んだ。

…まあ、こんな事考えてる事自体目の前の状況から逃げてるだけ
なんだけどさ…

うう怖くて父様の顔が見れない…でもいつまでもこうしてる訳に
もいかないし…

「あの…ね、父様…」

「麗稀様、こんなに朝早くにどうされました？」

え？いや…父様、その前にもっと突っ込むところが満載だと思う
んですけど…

例えば

「麗稀様がこんな朝早くに居るんだ？」とか

「なぜ麗稀様があたしのベットに居るのだ？」とか

「麗稀様と何かあったのか？」とかさっ！！

くうー！！全部麗稀様のせいじゃないかつ！！！！

こんなに有罪書類が溢れてる中で、すべてスルーで麗稀様に質問

ってどういう事!?

「と、父様？」

「関鈴。麗稀様をそのままお帰しするわけにもいかないね。朝餉の準備を頼むよ?」

「え、あ…はい」

いつもと変わらない父様の顔に、何だか一気に気が抜けた。

「なんだ取り越し苦労?…そんなに心配する事じゃなかったのかも…そりゃそうよね。もともと麗稀様しょっちゅううちに遊びに来てたし、昔は一緒に寝たりとか普通だったし、その延長って考えれば問題外って事?」

…それはそれでちょっと微かに残る乙女心が傷つくんですけど…

でも、乙女心と命だったら迷わず命を取ります

…この場が助かるなら…乙女心は封印しよう!

「じゃあ…準備してきます」

「ああよろしく頼むよ」

この後部屋に残った麗稀様と父様の会話なんて想像もせず、あたしはそそくさと部屋を後にしたのだった

あれ？（後書き）

短いので、二話連続更新です。

次は麗稀と父様の会話で一人称では無いです
読みにくくてすみません

閑話 密約（前書き）

*一人称ではありません

閑話 密約

閔鈴が部屋を出たのを確認してから彼女の父、将星は笑顔しょうせいを浮かべたまま麗稀の方へ視線を向けた

「さて、麗稀様？　どういう事か説明をして頂いてもよろしいですか？」

麗稀は将星の質問にすぐには答えず、ふうっと息を吐き目を閉じた

「すまない。暴走した…」

「おや…麗稀様が珍しい」

麗稀は閔鈴に全く持って恋愛対象に見られていない事に焦って暴走したとは言えず、さすがに自分の思いに気づいてくれるだろうと願って行った行為が…やっぱり全く相手にされて居ない事に気付かされただけで、自分に倍になって打撃を与えるとは思っても見なかった

「閔鈴はどうすれば私の思いに気付いてくれるんだろうか…」

こちらの思いに気付いてくれない限り、それを発展させる事など出来る訳がなく、麗稀のため息は深くなるばかりだった。それ対して将星は自分の娘の鈍感さに苦笑を浮かべるしかなく、しかしそうなった一因は麗稀にもあるので、

「うちの娘は色恋沙汰には疎いようで…すみません。」

としか言葉が出なかった。

「…やはりこのまま閔鈴を嫁に貰う事は出来ないか？」

「それは駄目です。お約束したでしょう？閔鈴が麗稀様に思いを寄せるようになったらいつでも喜んで送り出しますが、あれの気持ちが無視して後宮に入れる事になれば…」

「わかっている…」

…閔鈴を連れて国を出る。

閔鈴への気持ちで自覚した時に将星には素直に伝え、いずれ閔鈴を嫁にと言った。

その時、将星は麗稀の思いを王族だからと撥ね付ける事はせず、一つ約束をして欲しいと言っただけだった。それが今の条件。

その頃の麗稀は周りから王族という立場と見目によって傅かれる事に慣れており、まさか女に対して拒否される事など想像もしなかったから、簡単にこの約束を受けた

そしてそんな麗稀に対して唯一の例外が閔鈴。

閔鈴は麗稀を大切に思ってくれているだろうが、決してそれは恋愛感情へは進展しない。どれだけ思いを告げても、遠まわしな否定の言葉が返ってくるばかりだった。

さらに最近は王宮勤めによって一緒の時間を過ごす事すら倦厭される様になってきた。

だからと言って…既成事実を無理に行えば…自分の前から閔鈴が永久に居なくなる…

麗稀はがっくりと頭を抱きかかえた枕に埋めると、そこに残る閔鈴の香りに安心したが、本人を抱きしめたくなくなった。

「…諦めて頂けますか？」

「まさか！……その口調、私との事は反対なのか？」

世の女性で国王候補の麗稀との縁談を断る家など考えられなかった。

少しむっとした口調で麗稀が言葉を発すると、また将星は苦笑を浮かべ困った顔をした

「後宮は女魔の巣窟でございます。妾妃であれば道も険しいでしょう。あれが望めば喜んで送り出しますが…無理に行かせたいとは望みません」

将星が笑みを引き答える。

「私は…閔鈴を妾妃に迎えるつもりはない、閔鈴以外に嫁を取る気もない」

これには将星も驚いた表情で麗稀を見た。

一呼吸置いて将星が返事をする

「でしたら…尚更あれの道は険しくなりますね…」

だが言った言葉とは違い、将星の顔には笑みが浮かんでいた。

「…では、朝餉に参りましょうか？」

「閔鈴の手作りの朝餉…」

将星は呟いた麗稀の表情を見て「朝餉でこのように綻ばれるとは…まだまだ先は長そうだ」と思ったのだった。

朝餉

うっ~~~~ん、困った。とりあえず…台所に下りてきたのはいいのだけれど…

「何作ればいいのよ…」

うちの朝餉なんていつも手作りのパンと牛乳だけなの？

…さすがにそれを麗稀様に出すのはどうなんだろう？王宮の朝餉なんて知らないし…

「だからって…ご飯を今から炊いてる暇もないし…とりあえず、卵はあるから…目玉焼きは…付けるか…」

…確か執務室には紅茶が置いてあったから、牛乳は紅茶に変えるとして…

あっという間に出来たけれど…ほんとにいいのこれで？

テーブルに並ぶ…とまでいかないちんまりとした朝餉に思わず

「王宮に戻って食べて貰ったほうがよっぽど失礼にならないんじゃないかって気がしてきたんですけど…」

って言ってる間に階段を下りる音が聞こえてきたし…

ガチャ

とりあえず先に入ってきた父様に小さな声で現状を報告してみる

「と、父様…いつもの朝餉しか用意出来ないですけど…」

「構わないよ。こういうのは気持ちが必要だろう」

…父様…何か違うと思います。

王族に対しては気持ちよりも礼儀と作法だと思えます！

麗稀様がテーブルを見ても驚いてないのが唯一の救いだけど…

「麗稀様の口に合うかわからないですが…どうぞお席に…」

「ありがとうございます」

んぎゃあ！

それだけでなくも立っているだけでも絵になるのに、そんな満面の笑みは危険です！！気持ちは無くともくらっとなります！！

「…い、い、い、いえ…」

「席つてここ？」

もちろん上座に席はご用意しましたよっ！その隣に父様で…

「閔鈴」

「はい？」

「食事が二人分しか用意されてないけど…」

…それが何か？…ええ！！まさかもつと食べる人ですか！？麗稀様は朝餉から五人前とかいっちゃう人ですか？

「あの…足りなければ途中でお持ちしますので…」

「いや…そうじゃなくて、将星とこれは閔鈴の分？」

…あたし？何でそうなる…

「いえ…麗稀様の方です」

「…では関鈴の朝餉は？」

「後で頂きます」

時間ぎりですし、頂く時間があるとは思えないですけど…ね

「どうして？一緒に食べればいいでしょう？」

「…それは、給仕する者も必要ですから…」

「必要ないよ。これ以上に何か出てくるのであれば今運んでしまいなさい。そして一緒に食べよう…」

…何も出ませんがね。紅茶のお代わりとか…しなくちゃいけないかなって思ってたんだけど

「女人が王族と食卓を共に出来るのは王宮の宴に招待された人だけだど、王宮勤めの初日に習いました…」

「そんな事は今は気にしないでいい」

「でも…」

こういうけじめをしっかりと付けなくては…と思ったのですよ…
って…

「きゃあ！…！」

何で突然抱き上げる！？

「れ、麗稀様！？」

「くだらない事ばかり言うからだ」

「…く、くだらない事って…」

しかも座ったと思ったら…なぜ膝の上!?

「閔鈴。麗稀様もこう言ってお下さってるのだから、いつもの様に一緒に食べよう」

何でそうなる!?!っていつかこの状況みて!おかしいでしょ!?

「と、と、父様!?!」

お願い!この人どうにかして!!

「そうして麗稀様の膝に乗ってる閔鈴を見ると、昔を思い出すね」

ちつが~~~~~う!!

駄目だ…父様は頼りにならない…。自分の身は自分で守らなきゃ…

「れ、麗稀様。わかりました。一緒にたべま…パクツ!」

なぜパンを口に入れる?

「もごもご…」

何の羞恥プレイですか?これ?

父様も笑ってないでほんとに何とかする気ないの?

ああ…昨夜のオムライスと一緒に…顔が近い…近すぎる…。

うう…いつそ一思いに誰かあたしを抹殺して!!

「…ごくん」

「…美味しかった?」

美味しいってあたしが焼いたパンですけどっ!!
その笑顔に騙されないぞ!!ここは強く!!

……

……

「……美味しいです」

うう……白旗掲げて全面降伏です。

朝餉（後書き）

例えば自分が作った物でも、麗稀様の餌付け材料になります（笑）

欲の代償

…きつかった。

ほんとに今朝はへビー過ぎた…。おかげで仕事に来て、もう瀕死状態…仕事なんか出来るかつ！…って叫びたいくらい…

同僚で席があたしの前の？けんしょう成が出勤して来ていきなり言った言葉が

「関鈴、昨日はお疲れさ…ってやつれてすぎだろ！」

そんなにげっそりしてますかねえ。

へへって笑って見せたらがドン引きしてる…

「孝謙といい…儀晶様…恐るべし…だな…」

「？成、僕がどうしたって？」

ひいひい儀晶様いつの間にあたしの後に？

しかも完璧聞こえてるのに、「ん？言ってるらん？」みたいな雰囲気きんきが恐ろしすぎます

でもさすが？成、あたしなんて事切れた様に固まってるのにな…こり笑って

「儀晶様の『ド』S具合についての検証です」

「それは面白い。今度レポート提出」

「何なら被害者一覧も添付しますけど？」

会話が恐ろし過ぎますううう！！！！

もっと普通の同僚と上司が欲しい…

「ところで関鈴。話があるんだけど？」

肩をがっしり掴まれてるのは何故だろう？
まるで逃がさないみたいに……これは嫌な予感がする

「…賃金UP以外……遠慮します」

「それも関係あるかもね」

何？賃金UP？

途端にあたしの頭の算盤がカチカチなってる。ふつ金の亡者と呼ばれようと何と呼ばれようとあたしはお金と甘い物に弱いのだ。今年こそ屋根瓦も何とかしたいし……出費が嵩むのだから賃金UPは絶対に見逃せない！！

「何です？話って？」

「黒曜国で輸出入の国際会議が開かれるんだけどさ……」

…やばい。どんどん嫌な気配が濃くなってる。

これは話を聞くべきじゃなかったかも……

「通訳として参加して欲しいんだよね？あ……つまり出張？もちろん出張手当でるから」

やっぱりいい……無理、絶対出張なんてやだ！って言えたらいいんですけどね……

ここ外務部ですし……外交も当然仕事の内なので……

「…何時からですか？」

「来週」

「はあ！？ら、ら、来週って！突然すぎるでしょ？普通2ヶ月ぐらい前に予定出てるんじゃないんですか！？」

ありえない。問題解決の出張なら突然でもわかるけど、国際会議の出張が1週間前に予定されるってありえないでしょ!!!

「ほんとに孝謙が行く筈だったんだけど…」

儀晶様の視線を辿るとあたし以上にやつれた屍が…あれに鞭をさらに打つの？みたいな視線で見るなあああ！

「…って原因は儀晶様じゃないですかっ!!! 儀晶様が行けばいいんじゃない…」

「じゃあ閔鈴僕の代わりにうちで開催される国王会談に出席してくれる?」

…くふっ！国王会談…そんなVIP仕事…

「あ…ちなみにその後の晩餐会も他国の貴族も含めた1000人規模の物だから忙しいけど、変わってくれるなら僕は喜んで黒曜国に行くよ!」

「無理です」

そりゃ即答でしょ。無理でしょ? 1000人参加って何力国語が飛び交うのさ!

そんなの対応出来るのは…儀晶様しか…

って事はやっぱり…孝謙に鞭打って…あ…屍から何か魂みたいなのが飛んでる…

「黒曜国行きます…」

さすがに魂飛ばしてる人に鞭は打てない

「じゃ！宜しくね！麗稀様のお供だから」

「え？」

「代表者、麗稀様だからね。孝謙、資料関鈴に渡しといてね」

屍が手を挙げてる…。魂戻ってるじゃないかあ！！！！

っていうか…っていうか！！！！

れ、れ、れ、麗稀様のお供お！？

このあたしの今の状況で！？

もちろんその後あたしが屍2号と化したのは言うまでもない

打ち合わせ…のはず

最近、この執務室に何だか入り浸ってる気がするの、は気のせいじゃないよね…

目の前の麗稀様は超絶不機嫌そうな顔で座ってるし…

え？何をしてるの、かって？

そりゃもちろん黒曜国の会議の打ち合わせですよ？

「…だからどうして関鈴の部屋が侍女部屋で手配なんですか？」

……訂正します。出張の打ち合わせです。

「…ですから、そこは男性から急に共が女性に変わったので、しかし無理なんですよ」

…あくまで『出張』の滞在部屋の話ですよ！

「ならば尚更、どうして私と同じ部屋では駄目なのですか？」

……

………何ででしょうね？誰かこの人に教えてあげて下さい…

かれこれこの本来ならスルーすべき問題をわざわざ取り上げて下さり1時間…

もっと有意義な打ち合わせをあたしは望んでるんですが…

はあ…ここはもっと直接的に言うしかないんですよ…気が重

いです…

「麗稀様（その耳をウサギにして）よく聞いて下さいね。貴方は王族。私は庶民」

もちろん（）は心の声ですよ？そんな口になんて出しませんよ？
オーラは真っ黒に漂わせてますけどね…

「だから何です？」

ギブミー常識！誰か麗稀様にこの二文字を叩き込んで下さい！

「王族の部屋に泊まる庶民なんて聞いた事がありませんけど？」

「今回は急遽変更された事で、例外が適用されてもいいはずですが？」

ああ~~~~~!!!

今、無性に自分の頭をガシガシしたくなるのは何故？

「そんな例外ありえませんか」

「ありえないから例外でしょう」

……………どうしてくれようあの口を……………縫い込んでしまおうか……………

「とにかく…この件はもうこれで決定事項ですので覆りません。

以上」

「……………」

麗稀様の顔を見ても……………これは絶対納得してない……………
ってというか何でそんなに同室にこだわる？

「まったく一緒の部屋なんて妻でもあるまいし…」

つい愚痴が溢れてしまったのを許して欲しい…

そしてその言葉に麗稀様の目が光っていたなんてあたしは全く気がつかなくて…

「…妻ならばよいのですか？」

「はあ？何ですか？それ…」

「今言いましたよね？妻ならば同室でも構わないと…」

何で麗稀様がそんなに凄んでるのか意味わからないんですけど…

あ…！もしかして…

「麗稀様のお相手の方って通訳さんか何かなのですか？え？もしかして外務部にいらっしやるとか？」

え？え？そうなの！そうなのっ！！

何だかテンション上がって来たぞ！！

あたしだって行き遅れてますけど、乙女ですからね！恋話大好きですよ？一般の女性と王族の恋…絵巻物みたいで素敵ですね！

って外務部の女性で一般の方って言ったら…麗稀様と釣り合う美人

……いたっけ？

はっ！！顔じゃない！顔じゃないぞ！！麗稀様ともあろう人が顔で人を判断するわけないっ！！昔から麗稀様を見て来た自分が言うのだから間違いない。ちゃんと中身で判断してる筈！そうすると

…家柄で釣り合うのはあの人か…？いや…もしかしてあの人…？
まあ誰でもいいっ！出張変わってくれればそれでいいっ！！

「ならっ！あたしその方と出張変わりましようか？すぐに結婚
は無理なんで多分お部屋の件は何ともならないと思いますけど…」

「…何の話をしているの？」

はっ！しまった…一人で盛り上がりすぎた……

「すみません。私とした事が…つい…」

「ねえ関鈴」

…なぜ席を向かい側から隣に移って来られたんでしょうか？

「ほんとに気付いてないのですか？」

…何がですか？

と聞きたかったけど…何だか聞きかえしてはいけないってあたし
の中の危険信号が『エマージェンシー』をかき鳴らしてる

「では…また後日この打ち合わせの続きを…」

ここはやっぱり逃げるが勝ち…と思ったら…挟まれています…麗稀
様の腕に…

「逃がしませんよ…」

えっと…これって…どついう事でしょうか？

「関鈴はその鈍さもとても可愛いですが…いい機会ですから」

「ニブイ？イイキカイ？」

聞いちゃいけない…

心に鍵をかけて…

絵巻物の世界であって下さい

そうして私の意識はフェードアウトしていった

実はサラブレッド

あれから麗稀様が慌ててあたしを救護室まで運んで下さって、儀晶様もいつの間にかいらっしやって、今に至るわけなんですが…

「麗稀様、この後会議の予定ですよ？ 閔鈴の事は私がみておりますので…」

「儀晶…わかった…任せたぞ」

そつだ！そつだ！さつさと会議に行っちゃって下さい！

え？なんで聞こえてるのかって？気を失ったんじゃないのかって？え〜っつとですね…実は…

ガラガラ…

扉の音がしたという事は麗稀様が出て行ったって事ですよ？

「閔鈴。いつまでそうしてる気？」

ちよつとあきれた声の儀晶様の声

はは…ばれました？

「はい」

「…全く、気を失うって、何時の時代の女性？」

「お手数掛けてすみませんでした」

「ここはやはり起き上がって頭を下げないと…」

「可愛い姪っ子の為…」

「わ~~~~~っ！！！！儀晶様っ！！！！」

ぎゃ〜っ！！

この人いきなり爆弾発言かまそうとしてるよ？

あたしにとつてはメガトン級の爆弾よ？それ？

そりゃあもう慌ててあたしは儀晶様のみぞおちにタックルかまし
ちやいましたよ？

「ぐっ…閉鈴」

「誰が聞いているか分からない場所でそう言う事言つの止めて貰え
ません？」

抱きつく様な格好ですけど…違いますよ？

みぞおちへの強襲ですよ？これ？

って何でゆっくり手をあたしの後に回してさり気なく抱きしめち
やってるんですか！？

「…いい加減諦めたらどうなんだ？」

いつもと違うふざけて無い声色…ううこっちも緊張するじゃん…

「諦めたらどうなんだ？」これを意味する所も実は充分にわかっ
てたりする…

「嫌です…面倒くさい」

「…面倒くさいねえ」

「星家にも、月家にもなるつもりありませんから」

星家と月家、これに王家の陽家ようつけを加えると黄桜国の御三家となり
ます

実は何を隠そう我が朱家はこの両家の跡取りだった父と母が家を出て新たに王様から頂いた家名で…あ、でも絵巻物のような駆落ちの末の結婚…なんて事は無かったんですよ。二人とも頭のいい人だったので、きちんと自分以外の後継者に後を譲って穏便に家を出たんです。まあその譲られた後継者の一人が目の前の儀晶様で…ちなみに父の弟さんになるんです。

あはっ！一般人なのに実は血だけはサラブレッドだったんですよ！ただ…残念なのは、こんな腹黒鬼畜と少しでも血のつながりがあるのかと思うと…

「今凄く失礼な事考えてるだろう？」

「ま、ま、ま、まさか…滅相もない」

こんなに簡単に人の心を読むとは、さすが黄桜国一の魔術使いの家柄でいらっしやる…

「閔鈴が非常に顔に出やすいだけだと思っよ」

「……………」

ちなみに儀晶様のフルネームは『月^{ゆえ} 儀晶^{ぎしゅう}』現在の月家の御当主でいらっしやいます。

「兄様がお許し下さればすぐにでも閔鈴の後見人に月家なるのに…」

「いりません」

「何なら星家と連名で後見人でもいいよ」

「絶対却下です。論外です」

この両家、父達の結婚を認めて跡取りを他に譲る事も素直に認め

たくせに、異様にあたしには執着してるんですよ。

それはもう産まれた時から…何度誘拐されかけた事か…だから母を亡くした後、父はその危険性を避ける為に職場、つまり麗稀様と斎某様の所へ一緒に連れてつたんですけど…

…身内が一番危険ってどうよ？

一時期なんてこの儀晶様に嫁げとか…無い無い！絶対に無い！！

「いい加減…そっちこそ諦めて下さいよ…」

「何を？」

「あたしを養女だとか…後見人だとか…」

「無理だね。これは月家の総意だから…星家も一緒だと思うよ」

だから面倒くさいんですっ！！！想像しただけでそりやもうぶっ倒れるぐらいに！

文官になって王宮に勤めだしてから、星家も月家も静かになって諦めたと思ったのに…

「…っち」

「その舌打ちは気かなかった事にするよ。でもね閔鈴。王宮に勤めだしたって事は政事に携わる覚悟が出来たって事だろうと月家でも星家でもそう受けとられてる。つまり、今はこの現状で両家とも納得してるけど、暫くすれば次の段階に動き出すよ？それは覚悟しておいた方がいい」

「…って月家の御当主…儀晶様じゃないですか…」

「これは当主一人でどうにか出来る問題じゃないんだなあ…」

…って…あたし何様ですか？

単なる一般人の文字フェチ文官なだけなのに…うう胃が痛い。

「そろそろ麗稀様も本格的に動き出すしね…」

「え？…何か言われました？」

「いや…まあ頑張ってる…」

何て気の無い応援なんだろうか…

「取りあえず仕事に戻ろうか」

倒れた（嘘だけど）部下をすぐに働かせるなんて…鬼だ…鬼がここに
いる

「さ、行くよ」

「んぢや～～～～！～！」

王宮にその日けたたましい叫びが響いたとか響かなかったとか…

実はサラブレッド（後書き）

小話を活報で書いてます
よければどうぞ…

七不思議 その1

あゝ目の前の書類の山が今すぐ消えてくれたらいいのに
…え？文字フェチのあたしがこんな事を言うなんて？

そりゃそうですよ！だって目の前にある書類は全部翻訳のお仕事
じゃなくて、今度の出張書類の山ですもん…泣きたくなる…

つつつか屍一号！何でこんなに書類仕事たまってるのよ！！！！

「孝謙…」

…多少の八つ当たり…許して下さい

「今すぐ魔術課に行ってアンデッド化して不老不死になって、儀
晶様にも負けないアンデット化して…とりあえず逝ってきて下さい」

「つつつ…閔鈴酷い…」

ははっ支離滅裂な事を言ってるっていうのはわかってるんですよ？
ほらほら…口からまた魂見えてますぜ…

だあ~~~~！！！！

判子を押しても、押しても！サインを書いても、書いても！

仕事が終わらな~~~~い！！！！

しかもあの腹黒鬼…あ、目があったので訂正、儀晶様は事もあ
ろうか

「嘘寝した事+麗稀様から助けてあげたって事で通常業務も2倍
で！出張までにかつくり仕上げで心置きなく旅立つがいい」

いやゝさすがのあたしもあいた口が塞がらなかったよ。この台詞を笑顔で言えるのは王宮でも10人居ないよ？

あたしの頭が叫びを求めている

無性に叫びたいっ！

このドSな上司を持った自分を哀れみたいっ！！

ちっ…久々の本気モードでかからないととても出張までに終わる仕事量じゃない…げふん…いつも余裕を持って行動があたしの信条なのに…

こんな時は…もちろん…甘いもの！

あたしの視線にガラス瓶に入った飴が目にとまる。

これあたしの机の七不思議の一つなのよね。このガラス瓶あたししか開けられないように細工（多分魔術だと思うのだけど…）されて、なおかつ中の飴もあたし好みのチヨイスしかなくて、しかも無くなる事がない！いつも出勤すると瓶一杯になってるのよね…

まあ…他にも七不思議っていうくらいだからいろいろあるんだけど…それはおいおいで

ほら…疲れた今日のあたしには梅飴の塩加減が丁度欲しかったのよう！

ぱくんっ

これを食べると何だかまだ頑張れるって思うんだから不思議だね…

え？そんな得体の知れないものを食べて怖くないのだった？

完璧なチヨイス！

完璧な魔術！

そんなもん…出所なんて心当たりありすぎでしょう！

もし一番目の予想が外れてたとしても、2番でも3番でもあたしに危害を加えようとする輩に出来る高等技術じゃないですし…ね

…心の中でいつもお礼をいって有り難く頂戴してますよ

周りから「出た！閔鈴の隠し技」とか「閔鈴増強剤」とか「ドーパミング」とか聞こえてきますが、全部スルーで…

「よしっ！頑張る！！」

実は『閔鈴増強剤』と呼ばれる飴は、実は閔鈴の机の七不思議ではなく、外務部の七不思議である事を本人は知らない

七不思議 その1 (後書き)

いつか他の七不思議も出てくるかも…です

外務部、悪夢の一日

… 飴を舐めた時のあたしの仕事量はハンパない…らしい。自分ではあんまり自覚した事がないし、仕事中は一心不乱だから目の前の仕事以外に気を取られる事もない。ただ今みたいにふうつと息を吐き出した時に今までうずたかく積まれていた書類が減ったなあ…って思うから皆の言う事がそうなのかも？程度に認識はしてる

… 何だか視線を感じるんですけど…。

屍一号がキラキラした瞳でこっちを見てるし…

… いつの間にか孝謙がらみ書類が多いから彼の仕事もなんかこなしてみたい。

「相変わらず閔鈴の増強剤はすげ〜なあ」

「ああ??成なんか文句あるの?」

「いやあ〜すげ〜仕事つぷりに惚れそうになってるだけ…」

びゅん!

げ…なんか儀晶様の席から飛んできましたけど…

しかも?成もそちらに目もくれずに左手の指で挟むって…どこの隠密?まあ家柄的にも武道派なんでしょうけど…そう!何を隠そう…隠してないけど…彼、星^{せい}?成は私の母方の家、星家の一族だったりします。

…でも彼も挟んだそれが小苦無だとわかるとさすがにぎょつとした顔してる…

…ってか何で文官?武官になれば超スピード出世出来そうなのになえ〜

「儀晶様…さすがに死んじゃいますよ」

つて一応あたしが言ってみるけど…

投げた本人笑ってるし。目は笑ってないから超怖いし…

「殺すなら魔術使っし」

「……………」

なるほど……………って危ないっ！！！！

一瞬、納得しそうになった。

で…？成君…何で小苦無を懐にしまってるのかな？

「？成、それ備品だから」

「ちっ」

ちって何！備品だったら備品横領になるしっ！？

……………って何で備品で苦無！？

普通外務部の備品って筆とか紙とか辞書とか……………

あ……………また頭にエマーゼンシーが流れ始めた。よしっ！スルーしよっ！

「……………喉渴いた……………」

さつきから梅飴ばっか食べてたから口の中が塩分いっぱい喉がカラカラ…書類仕事の目処も立ったし…ちょっと休憩にするか…

「あのおくあたしお茶入れますけど…いる人います？入れるなら一緒に入れちゃった方が楽なんで手上げて下さい」

何で空気が凍るんでしょう…あたし変な事言った？
いつも入れてるメンバーも手を挙げないんだけど…

「孝謙、今日はいらないの？」

屍一号は机に突っ伏してまた魂が出てるし…

「閔鈴。…皆に入れてくれる？」

「あつ！儀晶様以外でお願いします！儀晶様にはきちんと食堂から運ばせますから」

「……………何で？」

…あたしは一段と部屋の温度が下がった理由が知りたいですけど…

「あたしが入れる適当なお茶より儀晶様には食堂の美味しいお茶のが似合います。あの食堂の高級な磁器でお茶を飲まれてる姿は絵巻物みたいで、写真が高く売れます」

「……………」

「あつ！じゃあ皆も今日はちょっと贅沢に食堂のお茶にしちゃう？そうしよう！」

「……………閔鈴言いたい事はたくさんあるけど、今日の所は食堂に僕が愛飲のお茶があるからそれを皆の分頼んできて…」

きゃ〜！儀晶様がいつも飲んでるお茶って確か幻の特等級茶葉だった筈！！

なんてナイスタイミングでお茶しようって言ったんだろっ！！
いっぱい仕事したし自分で自分を褒めて上げるよ！

「じゃ！いつてきま〜す！！」

待っててね〜特等級茶葉ちゃ〜ん！！

外務部、悪夢の一日（後書き）

活報で続きの小話有りです

危機、再び

げ…魔の扉が開いてる。

忘れてました。

食堂に向かうにはどうしても難所を越えなくてはならない事を…

前から疑問に思ってたんですけどね…外務部から何処かに行こうと思つたらどうして全部麗稀様の執務室の前を通らなきゃならないんでしょう？一旦外に出たら行けない事は無いですけど、もう一度身分証明なんかがあつて面倒くさい事極まりないですし…

しかも今は外務部から食堂にお茶のお願いの連絡しちゃってますから、そんな外に出てたらお茶の美味しさが…駄目です！そんなの駄目です！

う…麗稀様の執務室の前を通らなくちゃならないのは何だか不吉ですが…

「……………悪霊退散。悪霊退散」

…おまじないって魔力ゼロでも、効いてもらえますよね？

思いの強さって言いますよね！！あたしの今の思いはMAXですよ！MAX！！

「あ、関鈴。丁度いいところに」

ふふっ皆さん訂正です！おまじないも要魔力みたいですよっ！

「れ、麗稀様……」

「どこへ行くんです?」

「ちよっと……お使いに……」

「お使い?誰のです?」

行き先は言いたくない!断固として拒否権発動です!

仕事と思ってもらえれば万々歳です!休憩なんて言葉を言おうも
んなら……恐ろしい。

何とかして……何とかして……ごまかさないと……

「ぎ、儀晶様のお使い……なのです」

「へえ……儀晶の?」

「はい!では、急ぎますので失礼します!!」

ここは逃げるが勝ちです!

卑怯者と呼ばれようがどうしようが私は自分が可愛いですっ!!

……

……

いや……一生懸命ダッシュしたんですよ?私……

どうしていつまで経っても麗稀様との距離が離れないんでしょう
か?

「な、何で……麗稀様……ついてくるんですか?」

「なぜって…閔鈴さっき倒れたでしょう？もし途中で何かあったらどうするんです？」

「……………」

わ、忘れてた~~~~~!!!

そつだ！さっきあたし倒れたんだつた！？

「も、もう…だ、だ、大丈夫…」

ですからって言葉は受け付けて貰えないみたいで…

「もしもの護衛ですよ。目的地まで付いて行ってあげますから」

いらないうっ！！果てしなくいらないうっ！！！！

っていつか一文官ごときに王族が護衛って何！？逆でしょ！？逆！！！！

ああ…さっきのあたしどうして気を失ったフリなんてしたの…
自分の嘘にがんじがらめになつてくのですよ…

「って…麗稀様？会議は？」

「そんなものどつくに終わりました。もうすぐ定刻ですよ？」

ええ！？

夢中になつて仕事してたら…時間の感覚忘れてました。

…それ以上に、どうしましょう…頭のナビが言ってますよ『目的地周辺です』って…

「ねえ閔鈴。この先って食堂しかないけど？用事って食堂？」

「…あのお…そのお、あううう…」

「儀晶のお使いって事はお茶か何かかな？」

「ええ…まあ…」

「ってよく考えたら別にバテて困ることなんてないですよね！」

「みんなにお茶を持ってくなんて普通の事ですし…それじゃあさっさと用事を済まして…」

「すみませ〜ん！先ほど連絡した外務部ですけど〜！」

「は〜い！」

「おっ！この声は食堂一番の美人さん杏玉ちゃん（オウタマ）の声ではないですか！

「関鈴様すみません…まだ蒸し時…れ、麗稀様！？」

「あ…そうですね…。突然王族が食堂にいたら普通びっくりしますよね？」

「おお〜見る見るうちに杏玉ちゃんのお顔が真っ赤になってますよ。あたしにとっては見慣れた顔ですけど、他の女の子にとっては『麗しの麗稀様』ですもんね」

「こんにちは。食堂の方ですか？」

「出た〜〜！神々スマイル！！」

「これに参らない女性をあたしは見たことが無いです…！」

「ほらっ！！ほらあっ！！杏玉ちゃんの瞳が乙女モード全開になってますよう！！」

「はい…杏玉と…申します…」

「杏玉さんですか」

「はっはい!!」

…あのぉ…そろそろお茶を…なあって口を挟もうもんならどんなに仲の良い人でもすんごい形相で睨まれちゃうんですよねえ…今までの経験からして…

…だからと言ってこれに付き合っているとお茶が……

麗稀様を見ても…別に嫌がってる風でも無いですし…置き去りで帰ってもいいですよ

こそつと二人から離れてつと

…外務部で鍛えられたとんずらスキルはなかなかのもんなんですよ!

麗稀様とお近づきになれるっていう、こつという時の相手の女の方は協力的ですからね

ふふっ!今も杏玉ちゃんが必死に麗稀様の意識を自分の方に向けようと頑張ってるっしやいますし…

今この食堂で麗稀様に参ってないのってあたしと麗稀様自身と料理長のおっちゃんぐらいですねえ…

厨房を勝手に覗いちゃいますよ…!

…おつちゃ…ん

ええ…出来る限り小声で…

…おう!関鈴ちゃん!また偉い上物連れてきたな

きちんと小声で返してくれて…さすがっ!わかってらっしやる…!

…置いていくんでしばらく周り使い物にならないかもしれません

けど…すみません！

「がっはっはっ！了解！了解！お茶はそこに用意してあるよっ！」

小声で豪快に笑える人に初めて会った…

「おっちゃんありがとう〜！大好き！！また甘味差し入れするか
らー！！」

「待ってるぜい！」

「裏から出ていい？」

「おうよ！」

では…麗稀様ここで失礼します！

姿が見えない所で一応お辞儀して帰りますよ。礼儀ですからっ！

ワゴンのガラガラ音が少し気になりますが…あの扉を抜ければ本

日二度目の危機脱出です！

ふふ！今度おっちゃんに立花堂のお菓子差し入れするの忘れない
ようにしないとね！

扉マジック

うふふ…この扉何なのかしら？あたしにケンカ売ってます？
さっさと食堂からトンスラしようと思いましたが？思ったんです
よ？

なのにこの扉のせいで…

バタン。

「き~~~~っ！！何なのよっ！この扉っ！！」

普通食堂の扉って軽く押したら開くやつじゃない？

何でここはきちんとした扉になってるわけ？まあ……裏扉って
うのは置いておいて。しかもこの扉の何がむかつくってあたしがワ
ゴンを離れてわざわざ扉を開けにいったらですよ？ちゃんと開く
せにワゴンに戻ると閉まるってどういう事？

バタン。

「んぐぐぐううう……………」

…絶対馬鹿にされてますよね？これ…

もう一回…もう一回だけ試してみよう。

「扉を開けてっど…」

ガチャ

「開くのど…」

あつ！ここに物置いて支えとけばいいんじゃない！？
何か支えるものが…あつ！…っていうかワゴンで支えたらいいん
じゃない！…何で今まで思いつかなかったのあたし！！
よしっ！…ワゴンの端を持って…

ガラガラガラ…

え？あたしまだ持ってませんけど？

「…って、ちょっと！！！」

わっわっワゴン………ん！！どこに行く！？
あつ止まった、っていうか止めてもらった。

あれ？あの綺麗な手、何か見慣れてるんですけど…

「お手伝いしましょうか？」

「げっ！！…いつの間にかっ！！」

「…いつの間にかと言われると…閔鈴がワゴンを受け取ったぐらいで
すが…」

……それ、最初からじゃないですか。

「きよ、杏玉ちゃんは…」

「…？」

「え？いや…さっきの彼女…」

「ああ…」

ええ……！？何でそんなに眉間に皺よってるんですか！？あの食

堂のマドンナ、杏玉ちゃんですよ？さっきあんなにニコニコ話してたじゃないですか！

あれは何だったんですか!？

なあ〜んてさすがに自爆質問は致しませんよ？

それより…今はどうやって彼の手にあるワゴンを取り戻すかです。

……

……

全く思いつきません…どうしましょう…

既に中のお茶達は渋茶確定でしょう…ぐすん…特級茶葉が…

「まだ何か用事あるんですか？」

「え？」

あれ？ニコニコされてますけど…その顔、不機嫌ですね…

「えっと…」

「裏口から出るなんて他の所にも用事があるんでしょう？」

「……………」

やばい…

バレた時の事なんて考えてなかったです…どうする？

「まさか置いていこう…なんて考えてませんでしたよね？」

バレバレじゃないですか！…あ、汗が止まらない。
どうするのぉく？あたし！！

これはもうお茶なんて構ってられない…あたしの背後には扉…逃
げるしかない！！

ボタン！

「なっ！！！！」

何で今また閉まるのぉおお！！！！

麗稀様…何だか指先が光ってますが…

「も、もしかして…今まで扉閉めたのって…」

「…ん？風じゃないですか？」

んな訳ないっ！！！！

うう…そうですね。麗稀様にとって念動術ぐらい御茶の子さい
さいですよ…ああ風術でも全然余裕ですね！ははっ！！どっちで
もいいやつもう！！

「関鈴。こつこつ時言つ事あるでしょう？」

「う…」

「ちゃんとやわないと許してあげませんよ？まあ別にお仕置き」
「スでも…」

なっさらっと思ろしい事言いませんでした！？

しかもほんとに少し楽しそうな嬉しそうな顔してません！？

「うう、うう…」

「ううう…」

「……………」
「ごめんなさい」

ニコツと笑った麗稀様の瞳が怖い…

「悪いと思ってるなら、お茶ぐらい付合ってもらえますよね？」

「え？」

「丁度、料理長からお菓子も頂きましたし、執務室で頂きましたよ」

う

「え？」

「このお茶は執務室まで儀晶に取りに来て貰いましょうね」

「え？」

「じゃあ行きましょう」

え？つて我に返ると時、既に遅しで、いつの間にか手を奪われて…
しかも何で恋人つなぎ！？

「逃げ出さないように…」

「……………」

いやああああ…！！！！

誰にも聞こえない心の声があたしの中にだけ響き渡って…しかも裏扉も今までのが嘘のように自動で開きやがった…

八つ当たりだとわかっているけど…次来たとき、絶対裏扉ぶっ潰す。

桃飴

どうか…どうか誰にも出会いませんように…。麗稀様とのこんなところを見られたら…想像しただけで気絶もんです。

麗稀様はさっきの不機嫌はどうした？っていつぐらいに…に…に…超ご機嫌ですし…

「あの…麗稀様」

「却下」

酷い…まだ何も言っていないのに…。

ゴロゴロゴロゴロ

ワゴンは麗稀様がもう一方の手で運んでくれるし…手持ち無沙汰です。

でも、何だか懐かしいなあ。王宮の中でよく迷子になったあたしを麗稀様が探しに来て…泣きそうになつてあたしにいつも桃飴持ってきてくれたっけ…。それから帰り道によく王宮内を手を繋いで歩いた。

「ふふっ」

「閔鈴？」

「あ、すみません。昔思い出してました」

「閔鈴、よく王宮迷子になったからね」

「よく覚えてますね。…その節はご迷惑を」

「そりゃ覚えてるさ、嬉しかったからね。いつも齋某と一緒に閔鈴を探すのに見つけるのはいつも僕だった。桃飴を持っていくとね、ばあって泣き顔が笑顔に変わるんだ。その顔は今でも僕だけの宝物

だからね」

「……………」

「それで未だに……………」

ん？手を離して下さったのは嬉しいですが…麗稀様何を…そ…そ…
つて思ったら手を目の前に差し出されて

「……………桃飴？」

「あげる。持ち歩く癖が付いてるんだ」

そう言つて苦笑する麗稀様の顔は少し赤かった。それを見ちゃう
と…あたしも思わず顔が赤くなる。

「ち、小さい子に人気出そうな癖ですね」

「…以外にあげないよ。」

「…え？」

「桃飴は関鈴の為だけに……………」

実は他の飴も常備してるんだと人差し指で内緒の形を取る麗稀様
はあたしの記憶にある昔からの優しいお兄ちゃんの顔をしてた。

……………どくんっ

…何だろう？今、自分の中のどっかが跳ねた。

「…ん…れい？…関鈴」

「わっ！！…び、びっくりした…しました」

心臓バクバクいってるし……………もしかして、さっきの『どくんっ！』
もびっくりしたただけかも…麗稀様が桃飴を持ってるって聞いてびっ

くりしたんだ！きつとそうだった！！

しかも悲しいかないつの間にか口の中が桃味になってるし…きつちりまた手も繋がれてるし…あたしの馬鹿。でも、久しぶりに食べる桃飴は記憶通りやっぱり美味しくて

…昔から疑問に思ってたけどどうしても知りたい事、今なら聞けるかも…

「麗稀様、この桃飴ってどこで手に入れてるんですか？売ってるどころ見たことないんですけど…」

麗稀様がくれる桃飴は優しい甘さでとあって美味しくて、あたしが一番のお気に入りなだけ。入手先が昔から不明で、麗稀様からしか手にした事がなくて、つまり王宮に勤めだして、麗稀様を避けるようになってから久しく食べれなくて…色んなお店とか通販とか探したけど全然見つからなくて何度桃飴を思ってた泣いた事が…

「……内緒」

「……」
「入手先は教えられない。欲しくなったら、いつでも僕のところにおいて、用意しておくから」

「うっ…」

につこり笑う麗稀様が閻魔に見えるんですけど…畏な感じがばっちりなんですけど…

でも視線の先に見えた本物の閻魔な儀晶様を見つけて、今までの会話なんてぶっ飛んだんですけど…ね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9621t/>

溺愛キャンディ

2011年7月27日19時56分発行